

学校法人 仙台育英学園 秀光中等教育学校

二〇一七年度 第一次仙台・山形選抜試験

国語

(第一問～第四問)

注意

- ・試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないこと。
- ・この問題冊子は十二ページあります。
- ・答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

第一問 次の問いに答えなさい。

問一 次の——線の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 残暑が厳しい。
- ② 新しい産業を興す。

問二 次の——線のカタカナを漢字になおしなさい。

- ① 映画を見るためにゲキジョウに行った。
- ② コンピュータをサドウする。

問三 次の——線は同音異義語です。カタカナを漢字になおしなさい。

- ① 国に税金をオサめる。
王様が国をオサめる。
- ② ピザを六トウブンする。
ケーキはトウブンが多い。
- ③ 母のおトモをして外出する。
知らせを母とトモに喜ぶ。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

I

現在の社会の深刻さを示す現象の一つに、「うつ」の症状注1を持つ人の多さが挙げられます。おそらく歴史上、これほど「うつ」の人の割合が多い時代はなかったでしょう。

戦後の混乱期など、誰もが貧しかった時代でも、これほどの率にはなっていませんでした。生き延びるのに必死で、うつになっている暇ひまもなかったというのが実際のところかもしれません。

しかし、それだけで片付けられない問題が、潜ひそんでいる気もします。

以前の日本では、みんな豊かになろうという目標があったて、希望のある精神状態を保っていられました。

ところが昨今は、豊かになろうという共通意識など、もう成立していないと言ってもいい状態です。すでに物質的な豊かさは実現しているのだから、いまさら目標になどならないというのもしかたありません。

また、「みんな豊かになるのはいいが、自分と自分の周囲だけがそうなればかまわない。全体のことなんて、考えたってしかたがない。

どちらかといえば、そうした考え方が主流になってきているようにも思えます。「格差」という言葉が頻繁ひんぱんに使われるようになっていきます。それは、あらゆるジャンルで、「みんな進もう」という発想ができなくなっていることの表れな

のではないかと感じます。

それに現在は、あらゆる意味でのスピードが求められ、常にプレッシャーがかかっているような状態に私たちは身を置いています。

そして、人を切り捨てるスピードもまた、異常なほど速くなっていく。職場でも、学校でも、地域社会においても、いつ自分が切られてしまって、置いていかれてしまうかという恐怖と、誰もが常に向き合っていないければならないのです。それで、精神を病む危険性が高くなっているのです。

このような深刻な状況に対処するには、やはり学びの姿勢を取り続けることが何より効果的です。

②^{注3} 学ぶという行為は、自ら何かをつかみ取ってやろうという、狩猟的で前のめりの姿勢になることへとつながります。

社会のスピードはそう簡単に緩んだりほしないのですから、このスピード化が進んだ時代、後ろ向きの姿勢でことにあたっているのは、ますます対応ができなくなっていくます。

ここは学びの前傾姿勢でいることこそが、自分を守るポーズなのだと思っておきましょう。

そして、本来の学びというのは、常に知的興奮に満ちているものです。驚きや発見のある祝祭的な行為なのです。だから学びに積極的な人がいれば、その周囲は明るく祝祭的な雰囲気^いに **A** ものです。

驚きや発見のある学びを繰り返している人は、生きる喜びを常にかけているのだともいえます。学ぶ姿勢のある人は、いつも生命力に満ちあふれており、そういう人がいれば、その生命力が周りにも **B** ものです。学びの力は伝染して、活力のある場がどんどん生まれくるはずですよ。

③ 学びあるところには、停滞した空気は生まれません。もしも、現在の日本社会が少々うす暗い空気に包まれているのだとすれば、それを吹き飛ばして明かりをとすのは、必ずや学び続けている人たちであることでしょう。

II

かつての日本人は、学ぶ目的が大きなものへと向いていたものです。

たとえば明治時代であれば、学を志す人というのは、国家的な課題を解決することを目標に定めていたりしました。日本を先進的な国として発展させるために、また社会を啓蒙し豊かにするために、命を賭して勉学に励んだり、西洋へ留学しに行ったりしていました。

つまり、学ぶという行為が、社会の役に立つ行為と直結しており、誰もが学ぶとはそういうことであると、ごくふつうに考えていました。

それがいつしか、学ぶこと自体には、とりたてて目的を持たせないほうがいいということになった。^④ そのほうが高級な感じがするという風潮が出てきました。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

または、せいぜい自分だけが成功するための道具として、学びは使われるようになっていきました。

その結果、どうなったでしょう。よく学ぶことが、何か恥ずかしいことや後ろめたいことと思われたりするようになりました。「あいつは勉強ばかりしている」「ガリ勉くん」といって嫌われたり、まるで姑息注7な手段で成功を求めているように見えたりする状況が、出現してしまいました。

「教養」という言葉の扱あつかいも、ずいぶん変化してしまっています。

かつて「あの人は教養がある」というのは、ほめ言葉として最上級のものとして認識されていたはず。それが今では、何やら無駄むだな筋肉を身にまとっているような状態とみなされることのほうが、多いのではないだろうか。

実利的には役に立たないのに、気位ばかり高くてちょっと小うるさい。そんなイメージかもしれません。

それは本来、「うんちく」が多い状態のことを指すのです。うんちくは、知識がたくさん頭に詰め込まれてはいるのですが、それらがバラバラに散らばっている状態です。相互さうごの関係性が構築されておらず、そこに自分なりの考え方が加えられているということもありません。原理的な思考ができることと「うんちく」の多さは無関係です。

対して教養というのは、ある程度の知識があることは前提となりますが、むしろ知についての総合的な見取り図がしっかりと頭のなかにあることが重視されます。総合的な知力を

身につけている状態のことで、どんな場面においても自分の知を駆使くしして、事態に対処できる能力のことをいいます。

「うんちく」が一問一答式の知識であるのに対して、「教養」^⑦は、^{注8}論述問題の解答を自在に書くことのできる力です。

教養があるというのはつまり、学び力を備えているという意味でもあります。教養があり、学び力を持っているほうが、^⑧人生の喜びを感じ取れるわけですし、ものごとにもうまく向き合える。そういう人は、話す相手を楽ししくしてくれます。

そんなすばらしい効果のある教養を身に付けた人を、きちんと評価できない社会というのは、どこか歪ゆがんでいるのではないのでしょうか。

大学でさえ専門科目をとにかく早く履修注9させる傾向けいこうにあり、一般教養は軽視される一方です。私は、自分自身を振り返り幅広はばひろい教養が持つ力を確信しています。

(齋藤 孝「齋藤孝の学び力」)

注1 うつ……うつ病。極度に気分が落ちこんだ状態になる症状。

注2 ジャンル……いろいろな方面、分野。

注3 狩猟……銃や網あみなどの道具を用いて野生の鳥、けものを捕獲ほかくすること。狩り。

注4 祝祭的……お祭りのような。

注5 啓蒙……一般の人々に正しい知識を与えること。

注6 命を賭して……命を失ってもいいという態度で。

注7 姑息……誠実にものごとに向かわないでいいかげんにすること。

注8 論述問題……自分のまとまった意見を順序立てて書く問題。
注9 履修……定められた科目を習い修めること。

問二

——線②「狩猟的しゅりやうで前のめりの姿勢になる」とありますが、それはどのようなことですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

問一

——線①「『みんなで進もう』という発想ができなくなっている」とありますが、それはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 自分と自分につながる者だけが豊かになればいい、という考え方をする人が多くなったから。
- イ 現在の日本はこれまでにないほど、精神を病んでいる人の割合が多くなってしまっているから。
- ウ 昨今は物質的豊かさが行き渡わたっているので、これ以上それを目標とすることは必要ないから。
- エ 人々にスピードが求められるために、みんなが進むと遅くなるという意識がはたらくから。

- ア 学ぶことは、狩りかで獲物えものの走る速さにすばやく対応しようとするのと同じように、急いで取り組むということ。
- イ 学ぶことは、狩りかで獲物えものに襲おそわれないために体を低くして身を守るのと同じように、じっとして続けるということ。
- ウ 学ぶことは、狩りかで獲物えものにねらいをつけるのと同じように、つねに前をうかがい何かを求めるようにすること。
- エ 学ぶことは、狩りかで獲物えものにねらいをつけるときに興奮するのと同じように、気持ちを高めて行うということ。

問三

□ A、Bに入れるのに最もふさわしいものを、

それぞれ次のア～エから選び、記号で答えなさい。

A

ア おもしろがる

イ 染ま^くっていく

ウ 影^{えい}響^{きやう}を与える

エ しみこませる

B

ア 流^{なが}されていく

イ 繰^{くり}り返される

ウ よろこばしい

エ 浸^{しん}透^{とう}していく

問四

線③「もしも、現在の日本社会が少々うす暗い空気に包まれているのだとすれば」とありますが、筆者は「現代の日本社会」をどのように考えているのですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 今の日本は生命力に満ち社会のとどこおりは少ないと考えている。

イ 日本は深刻な問題も希望によって乗りこえた面もあると考えている。

問五

線④「そのほうが高級な感じがするという風潮が出てきました」とありますが、それはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ウ 今の日本にはいくつかの厳しい社会上の問題があると考えている。

エ 日本は生活の豊かさを社会に広く行き渡^{わた}らせつつあると考えている。

ア 命がけで学問にはげむのは、前後をよく見ないかっこうがわるいことだと思われたから。

イ 自分の成功を目指すために学問が使われ出して、それへの反省が社会にまき起こったから。

ウ 日本の先進国入りを確かなものとするために、よりいっそう高度な思考を重んじたから。

エ 国家や社会に役立ち人々のためになる学問は、学ぶことの純^{じゆん}粋^{すい}性がないと思われたから。

問六

線⑤「無駄^{むだ}な筋肉を身にま^まとっている」とありますが、これはどんなことをたとえていますか。それを表している一文の最初の五文字を書き抜きなさい。

問七

線⑥「うんちく」、⑦「教養」にはどちらも、「」が付けられていますが、本文中には「」が付けられていない、うんちく、教養、の語も用いられています。筆者はどのような考えからこの二とおりの書き方をしたのでしょうか。その説明としてふさわしいものを次のア～カから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「」がある「うんちく」は、必要な知識がたくさん蓄えられていることを強調して用いられている。
- イ 「」がある「うんちく」は、普段あまり聞かない言葉なので読者の注意をひくために用いられている。
- ウ 「」がないうんちくは、本来のうんちくによい面があることをあらわそうとして用いられている。
- エ 「」のない教養は、それが生きる上で大切な知識の大きな集積であることを説明して用いられている。
- オ 「」のある「教養」は、「うんちく」とは異なる教養の大事な点を明らかにするために用いられている。
- カ 「」のある「教養」は、一つの文章の中で「うんちく」の書き方とそろえるために用いられている。

問八

線⑧「人生の喜びを感じ取れるわけです」とありますが、これとほぼ同じ表現を、本文を大きく二つに分けた前半のⅠの部分から、二十五字以内で書き抜きなさい。ただし、句読点は字数に含めず。

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学六年生のぼくは、公園で出会ったおばあさんと親しくなったのがきっかけで特別養護老人ホーム「ひまわり園」に通うようになった。ここでは、捨てられ処分を待つ犬たちを動物愛護センターから引き取って、飼育していた。本文はそれに続く場面である。

三頭の犬たちは、みんなおとなしく犬舎に入った。たっぷり運動ができて満足したのだろう。穴ほりで足をどろだらけにしたサマーも、ほかの犬のあとをⅠについて歩いた。

「この歩き方、わたしに似てないか？」

大崎さんが犬舎の戸にかぎをかけながら言った。似ている。散歩に行くときからそう思っていた。でも、正直に答えては大崎さんに悪い気がした。

口をもごもごさせていたら、
「前にボーイのクラスでは、ガニマタおやじ、なんて言われたこともある」

大崎さんは自分で言って自分で笑った。つられてぼくもふき出した。

ガニマタなんてめっちゃおかしい。

①「テレビに出てくるズッコケおじさんみたい」
言ってしまったから、口をおさえた。

「じつは、あの犬を選んだのは、きみだけのせいじゃない。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

わたしも自分に似ていると思ったからなんだな。まあ半分半分だ」

なにげなく大崎さんの足元を見た。サマーは足の長さがちがうけれど、大崎さんはそうではない。歩き方にくせがあるというだけだ。

「ガニマタおやじの理由は、こういうことだ」

ぼくの視線に気がついて、大崎さんはポンと自分の左足をたたいた。

音がした。木をたたくような音が。

ぼくはびっくりした。それは人間のからだの音とは、ちがった。

びっくりしているうちに、大崎さんは青いジャージのズボンをまくり、太もものところまで一気にたくし上げた。

ずいぶん急なことだった。ぼくは「心の準備」というものができていなかった。だから三步くらい後退してしまった。

ズボンの下に足はなかった。代わりに、金属と肌色はだいろのプラスチックでできた道具がついていた。名前は知っていたけれど、本物を見るのは初めてだ。

「それって、義足？」

「そのとおり。そんなにこわがるなよ、武器じゃないんだから」

大崎さんはぼくのほうに左足をふみだした。

ふくらはぎの部分は金属の棒なのに、音はしない。ふつうの足のように、ちゃんと自然に動く。前にテレビで見た人造人間ターミネーターを思い出した。

「どうしてこんなふうになったか、知りたいかな？」

ぼくはうなずいた。

「わたしも昔はボーイのように、走るのが速かった。記録はボーイといい勝負かな。それが交通事故で、こんなふうになってしまった。中学三年のときだ」

大崎さんはゆっくりと話してくれた。学校の先生が授業で、古い時代のできごとを話してくれるように。ぼくはだまって聞いた。

「自分で言うのも変だが、大崎権兵衛おおさきじんべえ選手は中学三年のときに、百メートル走で県のチャンピオンになった。国体に出場したこともある。正式には国民体育大会というやつだ。それなりの成績だったから、将来は日本の代表としてオリンピックに参加したい、そんな夢をもっていた」

そう言って、いつものように眉まゆをピクピクさせた。

「中学を卒業したら、陸上部がとても強い高校に進学することも決まっていたんだ。それが、卒業式の前の日、交通事故にあった。ドカーンとね。車にはねられて左足が粉碎骨折ふんさいこつ、要するにこわれてしまったわけだ。すぐに手術を受けたけれど、ひざから下をなくした。なんだかテレビドラマみたいな話だ。つらかった。なにしろ十五歳さい、まだ青春の入口だったから」

ぼくは大崎さんの義足を見た。この足のせいで、おかしな歩き方になったのか。

「陸上部で活躍かつやくするはずだったのに、義足をつけての通学。しかも運が悪いことに、ひざの傷口からばいきんが入ってし

まい、二年後にもう一度手術をしなければならなくなった。まさに『泣きつづらに蜂』^Aだ。こんな言葉、知ってるかな？」

ぼくは首を横にふった。

「行きたいところがあつたわけじゃない。ただ、どこか遠くに行きたかった。そして行方不明②というか、どこかで消えてなくなりたい。そんなふうにした」

「電車に乗って、あちこち旅をした。ちょうど夏休みだったから、お寺や神社のかげでねたりしてね。お金もあまりなかった。いよいよ残りが百円くらいになって、最後の駅におりた。もうどこか海にでもとびこもうかな。そう思って、いなかの道をふらふら歩いた。夏まっさかりで暑いうえに、腹^{はら}ぺこだ。すぐくしんどかったのを覚えている。でも、そんなときだった、わたしがすばらしい風景に出会ったのは」

そう言って、大崎さんは右手を前にのぼした。庭のひまわり畑のほうに。

「見わたすかぎり一面のひまわり畑だ。ひとつひとつ太陽の形をした花が、強い日差しを浴びて金色にかがやいていた。ちょうどこんなふうだね。なんだか別の世界に迷いこんでしまったような気がした。ひまわり畑のずっと先には、海がある。わたしはしばらくそこに立っていた。すると、声が聞こえてきた。『海に行くなら、わたしたちの中を通って行きなさい』ってね。ひまわりがわたしに語りかけている、そんなふうを感じたんだよ」

大崎さんは目を細め、ひまわりのほうに耳を向けた。目も耳も、からだ全体で、昔の時間の中に帰ろうとしているように見えた。

ぼくもじっと耳をすました。ひまわりの声が、ほんとうに聞こえてくるかもしれないと思った。

風がふいて、たくさんの花がゆっくりゆれた。音は、Ⅱと聞こえた。大崎さんの耳には、言葉になって聞こえているのだろうか。

「ひまわりの中をかき分けて、まっすぐ歩いてみた。遠くから見ると、全部が一つの色に染^そまった畑なのに、近くで見ると、いくつもの色があつた。大きめの花もあれば小さめの花もある。同じようできて、実際には一つとして同じじゃない。あれも、これも、それも、少しずつちがった花が集まって、全体として大きなひまわり畑をつくっているんだ。そういうことに、わたしは気がついた。生まれて初めて気がついた。

^③ ああ、わかった！ 電気がビリビリ走ったみたいな感じで、わたしはわかった。……こんな話、小学生にはちょっとむずかしいかな？」

そう言われて、ぼくのからだにも電気が走った。小学生じゃない！ 来年はもう中学生なのだ。

「むずかしくなんかなくないよ。ちゃんとわかる」

「そうか。矢沢くんは感受性も理解力も人一倍あるからな。いや、失礼した」

「……………」

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

今度はちょっとⅢした。

「要するに、命ということが、わかった。それは目の前に広がっているひまわり畑のようなものだ。オリンピックで活躍できる人もいれば、事故で足を失う人もいる。生まれたときから足がない人もいれば、全身が不自由な人だっている。それこそ大きなひまわりと小さなひまわりみたいなものじゃないか。でも、どれだって、命であることに変わりはない。足が速い人にやれることもあれば、足がない人にやれることもあるだろう。たとえば、自分よりもっと不幸な人、めぐまれている人たちの役に立つことは、どうだろうか。これならだれにでもできるはずじゃないか。わたしはそのとき決めたんだ。この足で生きていこう、自分より小さなひまわりのために生きていこうって」

「みんなちがって、みんないい。」ってこと？ それならわかるような気がした。

大崎さんはやさしい笑顔になって、左足をたたいた。今度もかわいた音がした。

注³ 勇太もさやかも、ひまわりだとしたら、ぼくはその花たちに悪いことをした。同じ仲間なのに。ぼくは少しよごれたひまわりだと思う。どうすればいいのだろう。

「もしかしたら、旅の終わりの感傷もあったかもしれない」

「カンショウって？」

「いっときの気持ち。感じやすくなっているときの心の動き、かな。かわいい犬の映画を観て感動し、今すぐ犬を飼おうとするようなものだ」

そして感動がさめたら、捨てる。気まぐれみたいな意味か。「いっときの感傷で終わらせないために、わたしはひまわりを植えることにした。あの日の記念に、自分の気持ちが色あせないようにとね。そして、さいたま⁵ひまわりを見るたびに、自分の役目をしっかりと確認しよう。そんなふう思った。……あれから二十八年、今年もこんなにきれいな花がさいてくれた。ありがたいことだ」

話し終わると、大崎さんは深呼吸をした。

(本田有明「ぼくたちのサマー」)
(問題の都合上、一部省略したところがあります。)

注1 サマー……大崎さんに連れられて動物愛護センターに行ったときに「ぼく」が見つけた柴犬。

注2 ボーイ……大崎さんの息子でぼくと同級生の大崎彦左^{ひこざ}のこと。

注3 勇太……僕の同級生で、飼っている犬のことで学校のみんなにからかわれてしまう。そのきっかけを僕がつくってしまった。

注4 さやか……僕のクラスの学級委員で、僕がサマーの散歩中にさやかと飼い犬のプリンに会い、さやかとプリンをからかって泣かせてしまっていた。

問一



I〜IIIに入れる語として最もふさわしいものを次のア〜エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- I
- ア ガタガタ
 - イ スタスタ
 - ウ ヒヨコヒヨコ
 - エ ブラブラ
- II
- ア ゆらゆら
 - イ がさがさ
 - ウ そわそわ
 - エ さやさや

- III
- ア ムズムズ
 - イ ドキドキ
 - ウ ズキズキ
 - エ ギラギラ

問三

線①「言ってしまったから、口をおさえた。」とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

- ア 大崎さんの歩き方が犬に似ていると言ってしまった大崎さんに失礼だと思ったから。
- イ 大崎さんの歩き方がいやだと思っていることが大崎さんに伝わってしまったと思ったから。
- ウ 大崎さんの歩き方が変だとばかりにしたことで大崎さんにしかられると思ったから。
- エ 大崎さんの歩き方が変だということを思わず言うてしまった悪いと思ったから。

問二



線A「泣きつらに蜂」とありますが、本文中の意味として最もふさわしいものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

- 泣きつらに蜂
- ア 辛くて毎日を泣いて暮らすこと
 - イ 不幸のうえに不幸が重なること
 - ウ 泣きたいほど辛い気持ちのこと
 - エ 多くの人が一緒に泣くこと

問四



線②「行方不明というか、どこかで消えてなくなりたい。」とありますが、「大崎さん」がこのように思ったのはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

- ア 二回も手術をしなければならぬのが辛かったから。
- イ 事故の影響で走るのが遅くなり悔しかったから。
- ウ 人生の目的を失って絶望的な気持ちだったから。
- エ 一瞬で将来が奪われる事故の恐ろしさを感じたから。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

問五 —— 線③ 「ああ、わかった！ 電気がビリビリ走っ

たみたいな感じで、わたしはわかった。」とありますが、「大崎さん」はどのようなことがわかったのですか。説明しなさい。

問六 —— 線④ 「自分より小さなひまわり」とありますが、

何を指しますか。その内容を本文中から二十三字で書き抜きなさい。ただし、句読点は字数に含めず。

問七 —— 線⑤ 「ひまわり」とありますが、大崎さんに

とって「ひまわり」とはどのような存在ですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 生きる希望と人生の目標を与えてくれた命の恩人のような存在。

イ 辛い気持ちをいやし人生を楽しいものに変えてくれた友人のような存在。

ウ 行くところがない時に自分を温かく迎え入れてくれた我が家のような存在。

エ 不幸な現実から目を背けたときにしかってくれた先生のような存在。

第四問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 「そのこはとおくにいる／そのこはぼくのともだちじゃない／でもぼくはしってる／ぼくがともだちとあそんでいるとき／そのこがひとりではたらいっているのを」

谷川俊太郎さんの詩「そのこ」の書き出しだ。「そのこ」は、西アフリカのガーナで朝から晩まで働いている。チョコレート^②の原料となるカカオの木に登り、ナタを振るって実を落とす危険な仕事だ。「ぼく」は会ったこともなく、名前も知らない。

児童労働をなくす活動を支援する谷川さんが詩にし、塚本やすしさんが絵をつけて、五年前に絵本（晶文社刊）となった。本の中の「そのこ」は最初から最後まで後ろ姿しか見せない。いつも重い荷物を頭上に掲げている。どんな表情なのか、わからない。

一億六八〇〇万人の子どもが働かされているという。世界の五～一七歳の人口の一割以上になる。奴隷状態にある子どもを助け出したり、地域や家庭に子どもを働かす問題や教育の大切さをわかってもらったり、各国のさまざまな団体の地道な活動で少しずつ減ってはいる。だが、歩みは遅い。

詩はこう締めくくられている。「ちきゅうのうえにはりめぐらされた／おかねのくものすにとらえられて／ちようちよのようにそのこはもがいている／そのこのみらいのためにながでできるか／だれかぼくにおしえてほしい」

安い労働力に支えられた、安価な製品を求めたがる先進国

の消費者がクモの正体かもしれない。ならば、できることを「ぼく」に教え、歩みを速めるのは「わたしたち」大人の役目である。国連は、向こう一〇年で児童労働を根絶させる目標を掲げる。時間は多くない。

(毎日新聞「余録」二〇一六年六月一九日)

問一

——線①「そのこ」とありますが、どのような子ですか。本文中の言葉を使って、三十五字以内で説明しなさい。

問二

——線②「そのこのみらいのためになにができるか」とありますが、あなたは何ができますか。本文の内容をふまえて、考えを書きなさい。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)